

# 周辺からの記憶 11

～2013年度 むつ・多賀城・宮古～

村本邦子（立命館大学）

買ったばかりの『16歳の語り部』（雁部那由多・津田穂乃果・相澤朱音著、ポプラ社、2016）を読みながら、被災地熊本へ向かった。帯には、「16歳の今しか、伝えられない言葉がある。東日本大震災から5年。あの日、小学5年生だった子どもたちが見据える3.11後の未来」というコピーがある。3人の16歳が被災とその後の体験を語った記録だが、大人として恥ずかしくなるような深い洞察に満ちた子どもたちの眼差しを体感した。阪神淡路大震災から15年経って初めて語られた子どもたちの声をテーマにした『その街のこども』という映画があったが、今回、5年で子どもたちの言葉が私たちの耳に届けられたという事実に、日本社会にもある意味で進歩があったと言えるのかもしれないと思った。

熊本では、十年来おつきあいをしている支援者たちを訪ね、それぞれの被災状況や支援現場の話聞いた。知り合いをつてに、被災者した方々のご自宅を見せてもらったり、避難所の生活を見せてもらったりもした。阪神淡路大震災を経験し、東日本大震災後の東北に通うなかで、自分自身が知らず知らずのうちに身につけている知恵があることに気づいた。また、一般化された知恵がうまく活かされている例、知恵があったはずなのに受け継がれていない例、逆にマイナスに働いている例を見た。たとえば、東日本大震災後に発案された段ボールベッドというのがある。もともと仕切りもダンボールで、ある避難所は、それを使用していたが、別の避難所では、仕切りにカーテンを採用していた。

対人援助に関わる知恵というものもある。それをわかりやすく体系化したうえで、トップダウンに下ろすのではなく、それぞれが自分の状況に合わせ工夫して展開できるボトムアップの発想が求められるのだと思う。東北へ通うなかで学ばせてもらったことを九州にもつなげていきたい。まずは、16歳の語り部たちの声を熊本に届けたいと思う。



◀熊本駅構内おもやん通り（地下通路）には宇土張り子が展示されている。

作者の坂本紀美子さんは長年の大切な相談員仲間だったが、突然逝ってしまわれた。通るたびに虎にご挨拶するのだが、今回、被災された方のお宅で、偶然宇土張り子と出会った。すべては延々とつながっていくのだ。

## 2013年9月 むつ

### <準備>

新しい年度が始まると、むつからスケジュールと内容の確認メールが入る。今年は、これまで中心に動いてくれていた杉浦さんが移動になり、担当が変わるという。新しい窓口は、昨年、新人職員としてプロジェクトに参加してくれていた若手男性だ。院生と同年ということで話がはずんでいた。杉浦さんも非公式にバックアップしてくれるというし、まあ何とかなるだろう。現地では、実行委員会が予定どおり開催され、こまめに報告が届く。

今年も教員は一足早く青森に入り、フィールドワークを兼ねた夏休みの小旅行を楽しむ。そもそも温泉好きというのがあるが、現地の自然や文化に馴染むことは、人間理解に不可欠だ。今年、岩木山で「嶽きみ」というあまりにおいしいトウモロコシに出会う。

去年に引き続き、恐山をお参りする。地元の人たちにとって、今もイタコは生きているようだ。と言っても、イタコは、お祭りの時にしかいないらしい。だんだんと、青森に「帰ってきた」という気分が高まる。

プロジェクト前夜は、打ち合わせと恒例のレセプション。漫画展は1週間前に始まっており、9月6日（金）午後から支援者支援セミナー、お父さん応援セミナー、9月7日（土）漫画トークとプログラムを実施する。これまで杉浦さん個人に頼っていたところが大きく、互いに戸惑いもあるが、あらためてセミナーの趣旨と現地の事情とのすり合わせを行う。公的機関と十年協働する

ということのなかに含まれる人の移動の影響を感じるとともに、たとえ人が変わっても同じようにプロジェクトを実施できるのは、システムがあればこそだと思う。



### <むつでのプログラム>

支援者支援セミナーは例年、中村さんと一緒にやっているが、今年は時間が短くなり、対象者層も少し変わって、60人ほどの参加者の半分が民生委員、そこに保育所、児童館、保健師、児相スタッフが加わる形になった。4~5人グループに分け、前半は漫画冊子のなかの「贖罪」を事例に、後半は児相から提供された精神障害を抱える母子虐待事例をもとに、グループ・ディスカッションを交えながら進行していく。

事例提供者は、地域の人たちに児相の仕

事を理解してもらいたいという希望があったことから、家族の持つ力や地域のリソースに着目し、さまざまなバックグラウンドを持つ地域の人々が力を合わせて困難を抱える家族を支える視点を共有できるよう議論を進めていった。

「私たちはどうしても公的支援を考えがちですが、ケースによるものの、地域の力に頼ることも相談への層を厚くすること、拡大できることを学んだ」「児童相談所の方々がプロとしてどんなに大変な仕事をしているか具体的にわかり、自分にできることは何かを考えることが大事であることを知った」「地域・近所の力も大きな力になる。応援することの大切さがよくわかった」など肯定的フィードバックを得て、とりあえずの目標は達成できたかと思う。

一方で、地域の実情に合わせた協働支援システムを構築するプロセス自体を、もっとむつの支援者たちと協働できる様式を考えていけたらと思った。



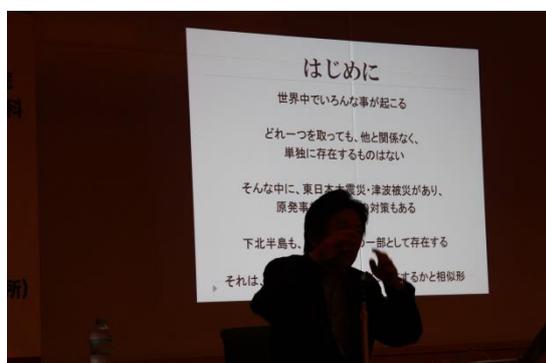
中村さんによる「お父さん応援セミナー」は、地元の学校のPTAの協力を得て、20名の父親たちが参加してくれた。結果的に動員されての参加者が大半を占めることになったが、いかめしい顔をして入っていった男性たちが、帰りには、柔らかくにこやかな表情で出ていくのが印象的だった。

3年目になると、漫画展のアンケートや感想ノートに「毎年、楽しみにしています」と書く人が出てきたり、偶然図書館に立ち寄ったという人から意外なメッセージを受け取ったりするようになる。たとえば、20代男性がアンケートに書いてくれたのは次のような内容だった。「2011年3月11日、私は大学4年生で、卒業式を控えていました。この震災で卒業式は中止、私はすぐに災害ボランティアの一員として8月まで活動しました。初めて現地に入ったとき、いつものまったりとした景色は消え失せ、この世の地獄のような惨状でした。このなかには、夫を亡くした人、逆に旦那さん以外、全員亡くなった人、子どもを亡くした人、さまざまな話を耳にし、毎日現場に入って話を聞かされた時に涙していたのを思い出します。震災から2年、今も心を病み、悲しみに暮れる家族がたくさんいます。どうかこれからも活動を続けてください。きっと救われる人たちがいるはずです」。

阪神淡路大震災の経験から震災直後に考えたことのひとつに、被災の影響を受けた人々は時間経過とともに拡散して、その存在は見えなくなり、孤立していく傾向が生まれるということだった。だからこそ、長期的に、被災地だけでなく、あちこちに、「一緒に考えましょう」というメッセージがやりばめられている必要があると思った。い

わゆる被災地以外でも、団さんの漫画展に「東日本・家族応援プロジェクト」の看板がついていることの意味である。

この男性のような経験と思いを抱えている人々が、実は他にもたくさんいることだろう。間接的であっても、漫画展を介してこうした人々と出会えることは、お互いにとって力を得られる経験である。偶然出会った絆の向こうに、まだ出会っていないたくさんの人たちの思いが連なっているということを知ることができるからだ。



## <次年度に向けて>

週末のプログラムには、職場を移動になった昨年のスタッフたちも顔を出してくれて、同窓会のような盛り上がりだった。

毎年、終了後に反省会をするが、みな率直で建設的である。3年目に入り、少しずつこれまで見えにくかった双方の文化の違いも理解するようになった。むつと京都、公的機関と私立大学という違いもあるだろう。たとえば、私たちにとってはやや堅苦しいレセプションがプロジェクトの継続にどんなふうに必要なのかとか、動員という形で参加者が集められることへの違和感も、先方の熱意の表れであるというような類のことである。「むつの人は引っ込み思案で、一人で行こうとなかなか思わない。動員であっても、とにかく来て貰わなければ何も始まらない。来て貰ったら良い内容なのだから、渋々であっても、まずは、一人でも多くの人たちに足を運んでもらうようにするのが自分たちの責任だと考えている」と言うのである。

最後には、担当者が涙したことにみな驚いたが、温かい拍手とともに、充実感と一体感を得て、今年のプロジェクトを無事終了することができた。



## 2013年10月 多賀城

### <準備>

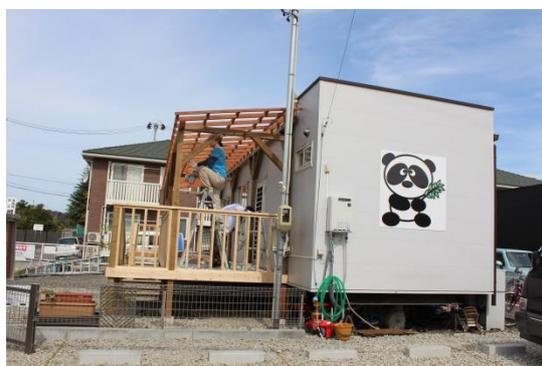
昨年度は、仙台市と多賀城市と1日ずつプロジェクトを実施したが、仙台はボランティアもイベントも多く、また移動してのプロジェクトでは慌ただしいこともあり、今回から多賀城に絞って開催することにした。昨年お世話になった上山真知子さん(山形大学)が声をかけてくれて、多賀城図書館で漫画展ができることになる。しかも1ヵ月間だ。

また、今年から研究科に来た増田梨花さんがこれまでやってきた被災地での絵本とジャズのコラボのイベントをプロジェクトの一環としてやりたいということで、企画がさらに広がった。こちらは図書館での開催が難しいので、文化センターを借りることにする。

### <フィールドワーク>

私は一足早く現地入りし、昨年のプロジェクトを共催してくれた「おおぞら保育園」を訪ねた。ちょうど、昨年、話題になっていた園庭がわりのデッキ工事中で、子どもたちは散歩に出るところだった。園長の黒川恵子さんによると、仮の園舎であるトレーラーハウスから正式な園舎に移り、認可を得るための準備を始めているとのことである。相変わらずのバイタリティに驚嘆させられるが、お話を聴くうちに、それが、前を向いて着実に歩みを重ねてこられた一人の女性であり経営者でもある黒川さんの自然な道なのだと思得させられる。被災によって急に別の人が現われるのではなく、それまで生きてきた人が被災の影響を受けて大

きく前進するのだ。話をしながらも、子どもたちへの対応や近隣の人々とのやり取りを眼にするにつけ、納得は深まる。昼食を御一緒し、国府跡や多賀城の港を案内してもらおう。「被災前は保育園から車に分乗して港に来ていたものだが、ずっと来れなかったんです。こんなふうになったんだ・・・」とつぶやいておられる。



その後、上山真知子さんを訪ねる。被災後の状況や活動についても聞かせてもらうが、「レジリエンスは、まず自分の身边から」とおっしゃったのが印象的だった。上山さんは沿岸部で育ったので、防災は十二分にあって、自分に余裕があったためにいろいろなことができたという。その意識の高さと寛容さには我が身を恥じるしかない。外からの支援がどんなふうに迷惑になったり役に立ったりするかについても話してくれたが、やはり、地域の人々が中心になって立ち上がるということが重要なのだと思う。3年目を迎えた支援者たちの疲弊についても考えさせられる。

翌日午後の空き時間には、塩釜から東松島へ行ってみる。知人が、自分の経験を語りながら、現地を案内してくれた。友人の家があったあたりも今や果てしなく広がる野原で、すすきやコスモスが咲き乱れ、墓石だけが残っている。お寺も住職さんも流されてしまったそうだ。新しい墓に花や供え物があるものもあれば、ひっくり返ったままの墓もある。

近くには大きなトレーラーやトラックが出入りし、プレハブが並んでいる。おそらくたくさんの人たちが動員されて復興作業にかかっているのだろう。鉄筋を組んでいる作業員に何をしているのか尋ねてみても、ベルトコンベヤーになるということしかわからないという返事だった。

少し陸地に入ると、1階はがらんどで2階に人が暮らしている様子が見える家がある。わずかながら、海岸近くに建てられた新しい家もある。水が入って避難者たちが亡くなったという小学校も解体工事に入っており、立ち入り禁止だった。



復興の陰で、大きな喪失を抱えたままの人たちが取り残され、ますます見えにくくなっていくのだろう。具体的なエピソードを聞きながら、以前、ここにたくさんの人々の生活があり、それが、人々の夢と一緒にすべて消えてしまったということに思いを巡らす。「このへんの人を捕まえれば、そんな話はみんないくらでも持っているのよ」と知人が言う。

## <多賀城でのプログラム>

10月5日(土)午前は、多賀城図書館で、団さんの漫画トーク。漫画パネルは図書館の入り口から階段に添ってきれいに並べられ、読みながら自然に2階の会場へと導かれていく。図書館の方々が工夫しながら大切に展示してくださっていることが感じられる。福島からビーンズ福島の中鉢さんと村上さんも駆けつけてくれた。図書館長と立ち話をするが、前は土木・水道課にいたとのこと、表面的には復興しているが、むしろ下、つまり下水がまだダメなのだという。また、水に浸かった人と浸からなかった人との差が大きいとも言う。バックグラウンドが違うと目のつけ所が違っていて、興味深い。

夜は支援者交流会。集まった方々のそれぞれの近況を共有するなかで、現地の支援者たちが被災後、どんなふうに支援を続けてきたのか、立場上、個人的なことは後回しにしなければならないことも少なくなく、そんななかで頑張ってきたことも少し具体的に理解することができた。何も力になれないことを申し訳なく感じるが、それでも、私たちが継続的に来ることを喜んでくれていることが伝わってきて、ありがたいと思う。私たちにはこの経験を何かにつなげていく責任があると思う。



6日(日)午前は、多賀城文化センターにて増田さんの企画。文化センターにはたくさんさんのポスターが貼られ、カラオケ大会に大勢の高齢者が集まっていて、賑やかで楽しそうだった。残念ながら参加者は多くなかったが、来てくださった方々には喜んでもらえたと思う。

昨年・今年と、私たちは、たまたまこの避難所の様子を聞き知っているが、もしも何も知らなければ、2年前にここが避難所で、当時は大変な状況にあったということなど思いも及ばないことだろう。こんなふうには復興は作られていくのだ。見えないからと言って、ないわけではない。多賀城にできたご縁に感謝しつつ、来年はどんな形で発展させていけるか工夫が必要だ。

## 2013年11月 宮古

### <遠野から大船渡へ>

1年目は遠野、2年目は遠野と大船渡でプロジェクトを開催した。もとより同じ土地に十年間通い続けることを希望していたが、なかなか継続的に共催してもらえそうどころが見つからず、立命館大学として多層に取り組みを展開している宮古で可能性を探してみることになった。とは言え、「また来ますね!」と言って別れた人々の顔を思い浮かべると心苦しく、個人的に1日早く現地へ行って、遠野や大船渡の街の様子を見て回ることにした。

花巻空港でレンタカーを借り、まず宮沢賢治記念館に寄ってみる。賢治は津波の年に生まれ、戦争と関東大震災を経て、津波の年に37歳で死んだことを知った。厳しい時

代と美しい自然のなかであの豊かな思想が育まれたことを感じる。



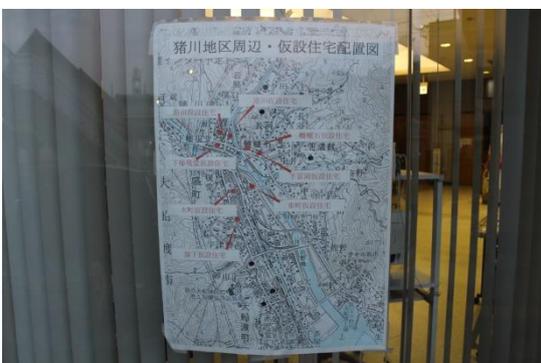
遠野は、紅葉が美しい季節。田んぼでは、時折、農作業をしている老人たちの姿を見かけるが、街中に人影はない。沿岸部へのボランティアが全国から波のように押し寄せていた一昨年とはうって変わって、のんびりと静かで平和な日常に戻っているように

見えた。遠野は、この夏、『3.11 東日本大震災：遠野市後方支援活動検証記録誌』を発行している。3.11 が少し過去になったということなのだろう。それでも、仮設住宅はまだひとつ残っているようだ。

一昨年の会場に立ち寄ってみるが、遠野博物館は休館で、蔵の道ミュージアムも閉まっている。伝承園とかっぱ淵を通り過ぎ、五百羅漢とデンドラ野へ足を延ばしてみる。五百羅漢は、江戸時代、度重なる飢餓で餓死者が続出し、その弔いのために、大慈寺の義山和尚が花崗岩に大小約 500 の阿諛修羅漢像を刻印したものの。



デンドラ野は、遠野物語の話者・佐々木喜善の生家の裏手に広がる。60 歳になると村人たちはここに捨てられ、自給自足の生活をしながら死を迎えたのだそうだ。近くにダンノハナと呼ばれる墓地があって、現世と来世の間の地と考えられていた。人里離れたところにあるわけではなく、まだ元気な老人たちは、昼間は村に降りてきて農作業を手伝っていたと説明があった。姥捨て山ともちょっと違うようだ。遠野物語にも感じられるが、このあたりの死生観は興味深い。



遠野から釜石を通過して大船渡に出たが、小学生や中学生が集まって、楽しみに下校中だった。ほとんどの子たちが大変な体験を持っていることだろう。今年の会場だったカメラホールまで行ってみる。「心を奮い立たせて頑張ろう」のスローガンはなくなっていて、残る7ヶ所の仮設住宅の地図が貼ってあった。1階の寄せ書きはそのまま、むしろ増えている。

隣の盛駅へ行ってみると、4月3日に三陸鉄道南リアス線吉浜駅までが復旧したということで、待合室はにぎやかだった。2011年3月11日、ここにも津波は押し寄せ、10月に駅舎を利用して「ふれあい待合室」が営業開始した。昨年、80冊ほど漫画冊子を置かせてもらい、その後、駅舎は改装されたが、3冊だけ大切にラックに立てられていた。

昨年泊まった大船渡プラザホテルの改装も終わり、街中には新しい門構えの食事処が並ぶ。街は少しずつ活気を取り戻しつつあるように見えた。主要道路は復旧が進み、前より便利になっている。現実には、地盤沈下のかさ上げ、区画整理地域の土地交渉、二重ローン、人口減少、高齢化と難しい課題が残っている。こうして格差は広がっていくのだろう。あちこちに、「津波浸水地ここまで」の標識が設置されている。

## <宮古へ>

翌朝、羅須地人協会（県立農業高校）に寄り、賢治が晩年暮らした家や火鉢を囲む教室用の部屋を見学した。黒板とオルガン。「賢治先生の家」というサインがあちこちにあり、賢治が人々に慕われている様子が伝わってくる。



レンタカーを返して、プロジェクト一行と合流し、ジャンボタクシーで宮古へ向かった。宮古は、三陸リアス式海岸の北端にある。震度5で、津波被害が大きかった。気象庁の推定による津波の高さは7.3m、避難対象者は5,227世帯12,843人とされている。

宮古に着くと、さっそく、会場となる「おでんせプラザ」で漫画展の設営をする。市役所から駅まで繋がる道の途中に中央商店街にある建物だ。この辺りも津波が押し寄せたところで、ところどころに空き地があり、草が茂っていた。新しい家や修理中の家もあった。今年、研究科に新任でやってきた鶴野祐介さんがプロジェクトメンバーに加わってくれたので、皆でにぎやかに、わいわいがやがやと工夫しながら設営。自分たちで一から設営したのは初めてだった。なかなか悪くない。後は人が来て

くれるかどうかだ。

設営が終わったので、夕方、希望者でタクシーを乗り合わせて、景勝地として有名な浄土ヶ浜へ行ってみる。台風の影響で大木が倒れ、サイドウォークが通行止めになっている。だんだん暗くなってきて、どうやって帰ったらいいのだろうと心細くなっていたところに、たまたまバスが来てくれたので、バスに飛び乗って駅前まで戻る。



JR 宮古駅と三陸鉄道宮古駅が隣り合わせに並んでいる。三陸鉄道の駅舎には、全国各地から宮古を訪れた人々の寄せ書きを集めたボードがあり、「頑張れ」、「負けんよ」、「一人じゃないよ。みんな一緒だよ」といった応援メッセージがたくさんあった。ホームにある列車を覗いていると、駅員が2人出てきて、「どうぞ」と暖かく声をかけてくれ、説明してくれる。「怪傑ぞろり」を描いた2車両の列車が止まっていた。「手をつなごうプロジェクト」というのをやっているそうだ。「あまちゃん」ブームで三陸鉄道は大人気だそうで、「皆さんの応援で復旧できて」と二人とも眼を潤ませていた。ここまでくるのに、いったいどれほどの道のりを越えてこられたのだろうか。三陸鉄道に対する誇りが伝わってくる。後で名刺を見ると、総務部長と旅客サービス部運転課長だった。



JR 駅の待合室には、「おでんせ みやこ」という冊子があった。宮古市の小学六年生が宮古市社会福祉協議会の協力のもと作成したもので、宮古の観光や特産物の情報とともに津波が発生した時の避難ルートや避難場所が書かれていた。裏面には「五つの提言」として「一つ 地震が来たら、迷わず高台へにげるべし!!」、「二つ 命を優先し、何

があっても戻らぬべし!!」、「三つ 助け合い、人とのつながりを大切にするべし!!」、「四つ 万に備え、防災グッズを準備しておくべし!!」、「五つ 未来に向けて、一步一步、進むべし!!」と書かれていた。小学生たちが被災者にインタビューしてまとめたものという。

6時半から駅前キャトル 2F の FM826 宮古ハーバーラジオに団さんと清武くんが出演することになっている。宣伝になるといい。

## <宮古でのプログラム>

11月2日午前、今回、協力頂いた社会福祉協議会を訪れ、宮古の状況について話を伺う。社協の前にはプレハブのボランティアセンターがあって、中をのぞくと立命館のうちのわがあった。プロジェクトのメンバーは、ボランティアの一人と話したらしいが、「立命館の学生たちとは一緒にやっていて、いつもよくやってくれる」と言ってもらったらしい。嬉しく感じるとともに、大きな組織の強みだと思う。



その後、海鮮丼を食べて、タクシーで30分ほど山奥に入ったところにある宿にチェックイン。信じられないが、そんなところしか宿がなかったのだ。宮古市内は宿が少なく、宿泊所がいつも問題なのだという。



宮古では、支援者の連絡協議会が組織されており、支援ボランティア（個人が多く、保健師や傾聴ボランティア、薬局の健康・食事相談など）と相談機関（公的機関が中心、警察、市役所、福祉、民生委員など）から成る。1～2 ヶ月に1度集まるが、学校や子育て支援、女性支援の関係の動きは見えていないという。15名の生活支援相談員が、宮古の仮設を回っている。話を聞いても解決できないことがほとんどで、怒りをぶつけられることも少なくないが、それで発散できるならと思うようにしている。訪問して扉を開けてもらえなくても、チラシに一筆メッセージを入れたり、季節ごとに花の写真を入れたりしている。相談員同士でよく話すので、メンタルな問題はなく定着がいいということだった。

外部からの支援が何かをするきっかけになればいいが、地元で NPO が立ち上がる気配はなく、経済基盤がなくて商売も立ち上がらない。「先が見えない。来年のことはまったくわからない」。できるだけ外部からの支援の希望は受け入れるように努めているが、今はもう支援が欲しいという気持ちはないということだった。こんなふうな時間を割いてもらうこと自体、負担をかけているということだろう。困難なか支援者同士が支え合って、工夫しながら活動されていることに頭が下がる。

午後のプログラムを行う仮設住宅の集会所に移動。おばあさんたち6人が外のベンチで待っている。プロジェクトのメンバーが田んぼの中の観音堂で知り合って声をかけたという。地元の方々と、仮設の人たちとは交流がなく、集会所やイベントは仮設の人たちのためのものだからと遠慮している

らしかった。鶴野さんによる「歌と遊びのワークショップ」を始めたところで、子どもたち4人が入ってくる。その後2人。おばあさんたちと関われたらと近くに誘ったが、どちらにも遠慮とはにかみがあるようで、二手に分かれたままだった。それでも、子どもたちが加わったことで、おばあさんたちの表情が変わったように思う。みなで手遊びや歌を楽しんで終えた。





次のプログラムは、私が準備した「アートで遊ぼう」で、タッチドローイングへ誘うが、おばあさんたちは帰り、子どもたちが参加してくれる。1時間は楽しげにやっていたが、途中で外遊びに行った子どもたちもあつた。終了後、外のベンチで子どもたちを見守りながら、一緒に時間を過ごす。少しずつ状況が見えてくるが、子どもたちは、仮設に暮らす子、仮設の前にある新しい大きな家に暮らす子(別の場所で被災)、地元の子らが混じっているらしい。大人たちは、地元と仮設の交流がないと言っていたが、子どもたちは立場に関わらず、固く結束しているようだ。そのうちボールが植木にあたつて、叱られてしまう。仕方なく、子どもたちは集会所戻つてゲームを始めた。「走つて30分」かかる学校か、もっと遠い公園まで行かなければ遊び場はないということで、なかなか厳しい状況での結束だと思った。それでも、こうして結束できることが子どもたちの力であることは間違いない。「また来てね!」と言ってくれた子どもに、「また会えるといいね!」と返しながら、悲しくなつた。ポスターを見て、楽しみにしていたと言ってくれた子どもだった。

漫画展をやっている「おでんせ」に戻ると、昨日のラジオを聞いて知つたという知

人のスクールカウンセラーが来てくれる。久しぶりに出会つたが、今は宮古の住人になって働いているのだという。一緒に夕飯を食べ、学校の状況を聞く。社協では学校関係の状況がわからないということだったが、そこをつなげられるといいのかなと思つた。駅前に戻り、タクシーで宿へ。不便なことをのぞけば、自然のなかの素敵な場所で、その夜、私たちは、満天の星と大きな流れ星を見た。

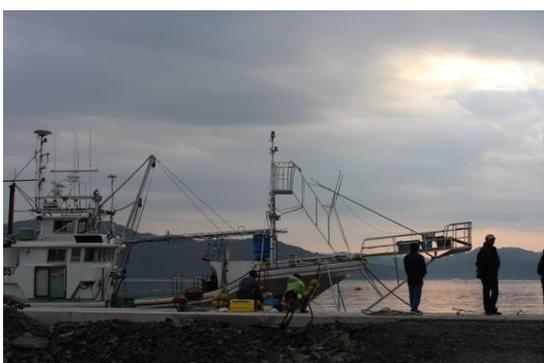
翌朝、「おでんせ」へ。漫画トークの設営をしてから、周辺を歩いてみる。港では男性たちが釣りをしていた。かわいいハゼが釣れるそう。愛想の良い男性もいたし、硬い表情の男性もいた。

「おでんせ」は、町の寄り合い場のようなものらしく、近所の人たちが立ち寄つて話していくが、漫画展を見るという感じでもなく、顔見知りと一緒にになると立ち話をしている。漫画トークには近所の商店街の年配の方々がきてくれた。場の構成も面白く、漫画パネルに囲まれて漫画トークがあるのも悪くないなと思つた。



終了後はパネルの撤収作業と後片付けをして、近所の魚市場に寄り、大槌町を通過して花巻空港へ向かつた。大槌町役場は間もな

く取り壊されるという。来年はどんなふうになっているのだろう。花巻に着く頃にはすっかり夜になっていて、銀河鉄道のメガネ橋が美しくライトアップされていた。



つづく